JACEM No.70, pp. 14-17、2020.05.25
（農業土木機械化協会）

特別寄稿

# 「ファウスト」の干拓事業

佐　藤　政　良

戯曲「ファウスト」がドイツの文豪ゲーテ（1749-1832）の大作であることはよく知られている。その中では干拓事業が重要な位置を占めているのだが、農業土木に関わる人間でも、そのことを知っている人は多くないように思われる。そこで、本稿では、「ファウスト」の作品とその中で扱われる干拓事業と土地（農地）開発について紹介するとともに、その背景について考えてみたい。

まず、「ファウスト」のあらすじを紹介しよう。なお、「ファウスト」には多くの翻訳があるが、本論は、新潮社版の高橋義孝訳[1]および集英社版の池内紀訳[2]の二つを基にしている。ただし、本文中の引用は、基本的に高橋訳を用い、一部池内訳を使った[注1)]。

主人公、ファウストは老学者であり、哲学、法学、医学、それに（むだとは知りつつ、と本人がいう）神学までも究めた人物である[注2)]。しかしファウストは、学問によってよくわかったのが「人間、何も知ることはできぬということだとは。思えば胸が張り裂けそうだ。」[1]と嘆く。そして、「世界を奥の奥で統べているもの、それが知りたい、また世界のうちに働く力と元素のすべてを見究めたい」と願うのである。

それを見ていた天上の神は、悪魔メフィストフェレス（メフィスト）をファウストに差し向け、ファウストはメフィストと賭をする。悪魔の力を使って、自分の人生がもうこれで満足だと思わせ、ある瞬間に向かって「とまれ、おまえは本当に美しい」と言わせたなら、そこで人生を終え、魂をメフィストにやるという約束である。

ファウストは、真に感動できるものを求めて、暗い研究室から出てメフィストと旅立つ。そこには乱チキ騒ぎのお祭り、戦争、政治、経済問題などがある。その中で、現実世界では乗り越えることができないような困難を、悪魔の力を借りながら突破し、ファウストは成功を経験してゆく。

ある時、媚薬を飲んで若返ったファウストは、田舎の美しく純真な娘マルガレーテに恋をする。メフィストの助けで二人は結ばれるが、それは田舎社会の中で彼女を破滅に追い込み、悲劇的な破局を迎える。その痛手から回復したファウストは、今度はギリシア神話の世界の美女ヘーレナと結ばれ、子供をもうけるものの、息子の死によってこれも悲劇に終わる。

この後、メフィストから、是非やりたいというようなことは見つからなかったのでしょうな、と問われたファウストは、「己はある大きなことに心を惹かれている」と答え、干拓事業をおこそうと思うと告げ、助力を頼む。メフィストの策略は、劣勢だった皇帝の戦争を魔力で勝利に導き、褒美として海岸地方の領主の地位を得させることで、首尾よく領主になったファウストは干拓事業を進める。事業の完成を目前に盲目になったファウストは、メフィストが自分の墓を掘らせる鋤の音を干拓工事が進む音と思い込み、高ぶる気持ちを吐く。

池内紀訳「ファウスト」第一部
表紙カバー、山本容子、集英社

Satoh Masayoshi：筑波大学 名誉教授

「あの山の麓に沼がのびていて、これまで拓いた土地を汚している。あの汚水の溜りにはけ口を付けるというのが、最後の仕事で、また最高の仕事だろう。そうして己は幾百万の民に土地を拓いてやる。安全とはいえないが、働いて自由な生活の送れる土地なのだ。野は緑して、よく肥えて、人も家畜も、すぐに新開地に居心地よく、大胆で勤勉な民が盛り上げた頼もしい丘のまわりに平等に移り住むだろう。外では海が岸の縁まで荒れ狂おうが、中の土地は楽土となるのだ。潮が力ずくで土を噛み削ろうとしても、万人が力を協せて急いで穴をふさぐだろう。そうだ、己はこういう精神にこの身を捧げているのだ。」

「己はそういう人の群れを見たい。己は自由な土地の上に、自由な民とともに生きたい。そういう瞬間に向かって、己は呼びかけたい、『とまれ、お前はいかにも美しい』と。己の地上の生活の痕跡は幾世を経ても滅びるということがないだろう――そういう無上の幸福を想像して、今、己はこの最高の刹那を味わうのだ。」

かねてからの約束の言葉を吐いたファウストは、ここで命を落とす。神も認めた賭けにメフィストが勝ったのであるから、ファウストの魂がメフィストの手に落ちて完結するものと思いきや、神が天使を遣わしてファウストの魂を取り戻し、天国に召すというどんでん返しが最後に用意されている。

以上があらすじである。この干拓地には運河が掘られ、宮殿が造られたが、多くが「緑の草地や牧場や庭や、村や森になっている」のは当然であろう。最近知ったことであるが、岡山県、農林省農務局および農地開発営団に勤務、その後東京教育大学に勤められた和田保教授は、1969年、71歳の時、雑誌「農業土木」にファウストの最期の言葉を紹介しつつ、「私は農業土木の仕事に携わる運命に置かれたことをこの上なく感謝する」と述べられている[3]。まさに、言葉の巨人ゲーテ（ファウスト）が、土木の仕事の意義を、見事、詩的に表現してくれたということであろう。

ただし、この干拓事業については、真っ向から対立する二つの評価がある。その一つは、柴田翔氏のもので、干拓事業そのものがメフィストの罠であって、ファウストはそれにかかって、自然に対する傲慢な挑戦をしようとしたのだという否定的な立場である。「その賞賛すべき人間の営為は、また同時に人間の傲慢さによって支えられています」とし、ファウストはメフィストの力を借りて上から事業を進めたのであり、盲目になった後、自分の墓を掘る音を事業の音だと誤解して発するモノローグ全体が「たとえいかにそれが美しく響こうとも――結局は自己欺瞞の妄想だ」と断じる[4]。

一方、「ファウスト」を翻訳した山下肇氏は、問題の個所に関する注釈で、「ファウストはすでに盲目となっていて、手探り状態であり、墓を掘る音を、自分の指図どおり働く人夫たちの鋤鍬の音とかんちがいしているが、盲目を契機に、彼の精神力は一段と強化され、あくまでも前向きであることがわかる」と書いている[5]。盲目がファウストをより純粋にさせ、最後の言葉を言わせたということであろう。

どちらが正しいと感じられるかは、人によって異なるかもしれない。ただ、ゲーテは、詩人でありながら、26歳から37歳までヴァイマール公国に勤め、小国とはいえ宰相の地位にも就いており、政治、行政等、社会の現実に深く関わっていた。したがって、美しい詩的理想も現実社会の中でしか実現できないし、それがまた極めて困難なことであることを十分に知っていた現実主義者であったはずである。それを示すように、1830年、「本物の自由主義者は、このつねに不完全な世界においては、時と状況に恵まれて、よりよいものを獲得できるまで、ある程度の善で我慢するのだよ。」と語っている[6]。

また、作品のはじめの部分で、神がメフィストをけしかけた際、ファウストの霊魂がつかまるものならやってみるがいいという一方で、「（しかし）善い人間は、暗い衝動に駆られても、正道を忘れるということはないものだ」と、作品の結論を予言するように神に語らせていることにも注目してよい。

改めて、この戯曲は全体で１万2,000行を超える分量をもつ大作である。これは、ゲーテが20代という若いときに構想し、全二部のうち、第一部（マルガレーテとの別れまで）を59歳の時に発表、第二部は81歳、死の前年になってやっと仕上げることができた、一生をかけた作品である。扱っている事象も極めて多岐にわたっており、この作品の意味やその解釈については、ドイツ文学者を中心に、古今東西、おびただしい

数の研究書、評論書が出されている。各部分についての解釈、意味づけも論者によって様々のようである。

筆者に、このような数々の評論に一説を加えるというような意図も能力ももとよりない。ただ、農業土木に関係する人間として、気になることがある。それは、ファウストが人生最後の活動として選んだのが干拓事業（それによる土地開発）だったことである。ゲーテは「ファウスト」の構成とその効果について熟慮を重ねたに違いない。当時のヨーロッパあるいはドイツには、ファウストの最後の行為・活動としてふさわしい候補題材は多くあったはずである。政治、経済、先端科学、絵画・音楽、哲学、宗教、医学・医療など、多才なゲーテは、それらのほとんどあらゆることについて勉強し、あるいは自ら研究を行っていた。にもかかわらず、干拓事業が選ばれた背景は何だったのか。

実は、ゲーテは、第一部の発表をした後、1816年（67歳）ころには第二部の完成をあきらめていたことが知られている[1),5)]。ところが、1825年２月末、ゲーテは突然、ファウスト第二部の完成にむけた執筆活動を再開した。芦津丈夫氏[7)]によれば、その三週間前の２月３日に北海沿岸部が空前の高さの高潮に襲われ、エルベ川河口付近に位置するハンブルグ市では水位が７ｍを記録した。これによって800人以上の人が亡くなり、多くの家畜も死んだという[注3)]。そして、芦津氏は、ゲーテの日記の分析などから、この災害の経験が「海との戦い」すなわち干拓というファウスト最後のテーマにつながったのであろうと推理する。

ファウストの干拓事業が、実際に発生した高潮による水害をきっかけにしていることは理解しやすい。ただ、干拓堤防の建設は「海との戦い」そのものであるとして、干拓の目的とされた土地の開発についてはどうであろう。これに関わるような議論は、これまでにほとんどみることができないようである。ゲーテの発言記録（自身の回想録『詩と真実』、対話録『ゲーテとの対話』）にも、土地問題や農村・農民についての話題はほぼ皆無である。そこで、それを考える上でのカギの一つとして、ファウスト最後の言葉の中の「働いて自由な生活の送れる土地」、「己は自由な土地の上に、自由な民とともに生きたい」というところに注目したい。この中に「自由」という言葉がしきりに出てくる。「平等に移り住む」ともある。もし、干拓事業と同様、土地開発もその当時の社会に起こっていた何らかの事象を背景にしていたとすれば、それは何であろうか。

ゲーテが生きた18世紀から19世紀にかけてのヨーロッパ農村では、それまでの三圃式農業に代わって、休耕地を含まない輪栽式農業が普及しはじめ、農業生産性が格段に高まった。その結果、第二次エンクロージャー（土地囲い込み）が進行し、農村共同体の基盤であった共有地が廃止された。この近代的土地所有制度の確立と農業経営の資本主義化によって、それまでの下層農民は、封建的束縛から解放され、自由になる一方で、それまで自由に利用できた土地を失うことになった[8),9)]。

このような状況下で、多くの農民が、自由に耕作できる自分達の農地が欲しいと願ったにちがいないことは容易に想像できる。ゲーテが、その当時の社会状況を見て、農地・農村の開発を干拓事業の目的に据え、ファウスト最後の仕事にさせた可能性はないであろうか。これは、農業土木人の目からする一つの仮説である[注4)]。

その頃、ドイツの人口は急激に増加し始めていた。現在のドイツの範囲の人口を推計した研究[10)]を基にすれば、1805年以前、それまで65年間の人口増加率が年0.5％程度であったものが、それ以後、わずか35年間で人口は1.5倍、年増加率にして1.2％になった。これが、先述した伝統的農村の解体と相まって、1830年代ドイツの産業革命を準備したといわれる。近世から近代への転換期である。

以後、アジア・アフリカを中心とする植民地事業が行われ、第二次大戦後から現代にかけては発展途上国の人口増加と、それに対応する食料増産・農地開発はまさに地球規模の重要課題になった。また、2019年12月、残念なことに凶弾に倒れた中村哲医師が医療活動を中断してまで取り組んだアフガニスタンでの灌漑用水路建設活動[11)]にみられるように、ローカルなレベルでは、農地開発が何よりにもまして喫緊な課題になっている国・地域がある。

ゲーテは、現代につながる大きな転換点に生きた。もしかすると、その時代の農村の変化、土地問題の意味をするどく感じ取ったのかも知れない。ちなみに、

ゲーテは、「歴史というものは、主として自然の法則にのっとった人類の増殖にもとづいている」[12]という人口増を基本とする歴史認識の枠組みをもっていたことを指摘しておきたい。

最後に、農業土木あるいは土木の視点から、「ファウスト」の干拓事業の、現代にもつながる二つの問題をみる。

ファウストの干拓事業が完成に近づいた時、干拓地全体を一望できる高台に礼拝堂と老夫婦が住む小屋があった。自らの行為の完全性を求めるファウストはこの土地を手に入れたいと望み、干拓地の中にとりわけ良い条件の代替地を用意して夫婦と交渉する。婦人は頑として動こうとせず、いう。「あんな水っぽい土地はまっぴら。この丘を守って見せます！」[2]

そこでファウストがこの交渉をメフィストに命ずると、メフィストは手荒な振る舞いで夫婦達を殺してしまい、小屋と礼拝堂は焼け落ちた。報告をうけたファウストは「換地のことは言いつけたが、力ずくでとはいわなかったはずだ」と叱責するが、後の祭りである。ファウストは、魔法を吹っ切り、ひとり立ちできたならば、と悔やむ。

この場面について、補償問題の第一人者であった東京工業大学の華山謙教授は、土木学会誌への寄稿[13]の中で「メフィストの魔力を借りて力づくで移住させようとすれば、どんなことが起こるか、それまでの経験からして、ファウストに分からなかったはずはない。どうしたらいいか、ここでそのことを論じるつもりはない。ただ、土木技術者の心のうずきを、すでに２世紀も前にゲーテが知っていたことをお伝えしたかったのである。」と書いておられる。

もう一つの問題は、干拓堤防の安全に関わる。ファウストが干拓堤防工事の鋤の音を聞きながら「埋め立てた土もうまく納まり、波もしかるべきところで堰きとめられ、海に対しては堅固な堤防が築かれるのだ。」と述べると、メフィストは（わきを向いてひとりごと）「お前さんが土や石で堤防を築くのも、つまりはおれたちのために骨を折っているということなのさ。なぜってお前さんは、水の悪魔のポセイドンに大盤振る舞いをやらかそうというのだからな。どうじたばたしたって、もう駄目だ――四大[注5]はおれたちとぐるになっているのだ。すべては破滅に終わるのだから。」という。

ポセイドンは、ギリシア神話の海と地震の神で、津波や地震を起こす力を持っている。メフィストは、必死になって事業を進めるファウストに対し、大きな自然の中でちっぽけな人間がどんなことをやろうとも、結局は無駄だ（かえって大きな災害をもたらす）、とうそぶくのである。しかし、それを分かっても、なお努力せざるを得ないのが人間の定めである。

地震、津波、洪水と、近年、自然の猛威にさらされている我々には、メフィストの言葉は現実味をもって迫ってくる。まさにいま、我々には、人間の生活をより豊かで安全なものにしようと努力し作りあげてきた国土を、自然の脅威からどのように守り、持続させていけるのかが問われている。

こうみると、「悪魔」とは悪を行うだけの存在ではない。ゲーテは、「デモーニッシュ（悪魔的）なものとは悟性や理性では解き明かし得ないもののことだ。生来私の性格にはそれはないのだが、私はそれに支配されている。」と言い、さらに「デモーニッシュなものはあくまでも肯定的な行動力のなかにあらわれるものなのだ。」と説いている[14]。悪魔は排除するのではなく、その存在を理解し、受け入れないといけないもののようである。

「ファウスト」という作品を、農業土木という視点からのぞいてみた。作品の背景には、ゲーテが一生をかけて作りあげた巨大な宇宙があって、極めて小さな部分をとっても簡単に説明し尽くせない。それだけに、読む人にはそれぞれの「ファウスト」があるに違いない。

謝辞

本稿の執筆に当たっては、一般財団法人　東京ゲーテ記念館の資料室から「ファウスト」研究の状況等について有益な情報と資料の提供をいただいた。著者の問い合わせに対する丁寧な対応とご教示が大変有り難かった。記して、心より感謝申し上げる。

**【注釈】**

注１）池内紀の訳本は、「ファウスト」ドイツ語原文で用いられている韻文を、あえて日本語の散文に訳した挑戦的作品である。また、多くの挿絵（山本容子によ

る）があって読みやすい。内容が読者に正確に伝わるよう、一部にこの訳を使った。

注２）柴田翔氏（文献４）によれば、この４つは、近世ヨーロッパの大学を構成するすべての学問分野である。

注３）北海沿岸は、1825年の前年末から、激しい暴風雨に襲われていた。1824年12月９日、ゲーテを土木局長と教授が訪ねてきて、ペテルブルグの大洪水、水害のことがつっこんで話し合われたという[15]。

注４）ゲーテはエッカーマンに向かって、「生粋の詩人にとっては、世界についての知識は、生まれながらに備わっており、世界を表現するのに、もろもろの経験や大きな経験上の知識など全く必要としないものだ」、と語っていたという。これに従えば、自由な土地というものが、経験などに基づかない観念上の理想であるとみなすことも不可能ではないであろう。この例を新妻篤氏の論[16]にみることができるように思う。しかし、エッカーマンが、「でも、『ファウスト』全編を通じてどの一行にも、世界と人生に対する注意深い探求のあとがありありと残っていますし、世にも豊かな経験をへずに、これら一切の事が生まれながらにあなたに恵まれていたなどとは、だれにもとうてい信じられないことです。」というと、ゲーテは「そうかも知れない」と答えた[15]。いくらゲーテでも、観念的な理想の「国家・社会」は想起できても、そこに「働いて自由な生活の送れる土地」、「平等に移り住む」というような言葉が付属したのであるから、具体的な経験が背景にあると考えるのがふつうではなかろうか。ゲーテの交友は上流階級の人間に限られていたようであるが、上流階級の大地主の話題や交流を通じて農村の状況を把握する機会があったとしてもおかしくないのではないか。

注５）四大とは仏教用語、四大種の略で、物質界を構成する四つの元素である、地・水・火・風をいう。

**【参考文献】**


1) ゲーテ（高橋義孝訳）：ファウスト　第一部（1967）、第二部（1968）、新潮文庫
2) ゲーテ（池内紀訳）：ファウスト　第二部、集英社（1999）
3) 和田保：随想二題、農業土木、第238号、全国農業土木技術連盟（1969）、「農村振興」平成30年10月号（全国農村振興技術連盟）所収
4) 柴田翔：ゲーテ「ファウスト」を読む、岩波セミナーブックス11、岩波書店（1985）
5) 山下肇：ファウスト訳注、ゲーテ全集　第３巻、潮出版（1992）
6) エッカーマン（山下肇訳）：ゲーテとの対話（下）、岩波文庫（1969）
7) 芦津丈夫：ファウストと海との戦い、ゲーテ年鑑 第12巻、関西ゲーテ協会（1966）
8) ハンス・モテック（大島隆雄訳）：ドイツ経済史 1789-1871、大月書店（1980）
9) 三ツ石郁夫：ドイツ地域経済の史的形成、勁草書房（1997）
10) U. Pfister and G. Fertig: The Population History of Germany, Research Strategy and Preliminary Results, MPIDR WORKING PAPER WP 2010-035, Max Planck Institute for Demographic Research, Germany, 2010 https://www.demogr.mpg.de/papers/working/wp-2010-035.pdf
11) 中村哲：医者、用水路を拓く、石風社（2007）
12) ゲーテ（山崎章甫訳）：詩と真実　第二部、岩波文庫（1997）
13) 華山謙：ファウストの心のうずき、土木学会誌、1981年５月号
14) エッカーマン（山下肇訳）：ゲーテとの対話（中）、岩波文庫（1968）
15) エッカーマン（山下肇訳）：ゲーテとの対話（上）、岩波文庫（1968）
16) 新妻篤：ゲーテ『悲劇ファウスト』を読みなおす、鳥影社（2015）